「黒い食器の魔法」

受賞者：福田 良美さん

摂食・嚥下障害看護の認定看護師になって5年目の春に、忘れられない患者さんと出会った。Aさんは80代女性、既往に認知症があり原因不明の下痢と重度の脱水で入院された。肺炎を併発しており誤嚥性肺炎の疑いがあった。点滴が開始され脱水は徐々に改善、呼吸状態も安定し嚥下機能の評価のため認定看護師である自分に依頼があった。嚥下機能は維持されていたため飲水と嚥下食を開始した。上肢の動きは可能なためAさん自身で摂取を促したが自分では摂取せず、介助すれば10分ほどで全量摂取が可能であった。

そんな日々が続いたため私はAさんが自分で食べようとしている姿を後ろから30分観察してみた。するとAさんが白い食器に入っているお粥をずっとスプーンでつついている事に気付いた。Aさんはお粥が白色のため食器と同化し、食事として認識しにくいのではないかと考え、お粥の食器を栄養部に依頼し黒色に変えてもらった。お粥を黒色の食器に移してみると魔法がかかったかのようにAさん自身でお粥を摂取することができた。その後、病棟看護師と協力し合い黒い食器に毎食お粥を移し替えることで、副食含め積極的に食事が摂取できるようになっていった。食形態を常食まで変更することができ、長く続いていた水様便も落ち着き、最初は施設入所予定であったが自宅退院を迎えることができた。

退院近くにAさんの顔を見にいくと「あんたには良くお風呂にいれてもらった。ありがとう」とお礼を言われた。自分は食事の場面でしかAさんと関わっていないので不思議な感じがしたが、あとから考えると水様便が不快で、よくオムツに手を入れてしまっていたため、食事の前後に洗面所に一緒に行って手を洗っていたことを覚えていてくれたのだと思った。きっかけは黒い食器に変えたことではあるが、Aさんの力で回復を促すことができた関りであり、今も元気に外来に通うAさんを心から嬉しく思っている。